

博士課程1年目を終えて:学会発表とネットワーキングの広がり

氏 名： 田中 智章 2022 年度 (11 期)

修学機関： ロンドン大学クイーンメアリー校 博士課程 経済学専攻
Queen Mary University of London, PhD Program in Economics

研究テーマ：モンゴル年金改革の経済分析 -インフォーマル労働者の年金需要及び
経済・健康行動への影響-

"Economic Analysis of Mongolian Pension Reform: Impacts on Informal
Workers' Pension Demand, Economic Behaviour, and Health Actions."

略 歴 (たなか ともあき)

独立行政法人国際協力機構 (JICA) 審査部マクロ経済審査課にて勤務。2009 年慶應義塾大学経済学部卒。2011 年東京大学経済学研究科修士課程修了。2011 年より、JICA にて事業評価業務や、公共財政管理、金融分野等の技術協力業務に従事。2015-2018 年には JICA モンゴル事務所にて社会保障、教育分野に係る ODA 業務に従事。その後、JICA 財務部、緒方研究所を経て、2021 年より英国 Queen Mary University of London (QMUL) の MRes/PhD Program in Economics にて留学。2023 年に帰国し、JICA 審査部での勤務を継続しながら、同 PhD プログラムに在籍。

2023 年秋にロンドン留学を終えてから、早くも一年が経過した。この一年は、研究活動と仕事の両立に忙殺される日々だったが、充実した時間を過ごしている。前回のブログで述べた通り、PhD 課程では研究に専念し、現在は博士論文の完成に向けて、複数の論文を同時並行で進めている。具体的には、モンゴルの年金政策を題材として、先行研究調査や、データ分析、指導教官との定期的な面談、執筆、学会発表などを行なっている。今回は、学会発表の経験を振り返りたい。

学会は、研究者が自身の研究を発表し、意見交換を通じて成果を共有し、研究の質を高める場である。またネットワーキングの場としても重要な役割を果たしている。この1年間で、私は国内外の複数の学会やセミナーに参加し、自身の研究を発表する機会を得た。

開発関連では、「開発経済学会 (JADE)」の若手会議と大会に参加した。国内を代表する開発経済学の学会である JADE は、2019 年に設立された。設立は比較的新し

いが、その起源といえる研究会「箱根会議」は 2001 年に遡る。最近では、研究者だけでなく実務家の参加も増え、会員数が増加しているようだ。

JADE 若手会議は 23 年 11 月に京都大学で開催された。この会議は若手研究者同士の交流や学部・大学院生に対する勉強の機会の提供を主な目的としており、「予備成果報告」や「研究の種」といった論文の前段階の研究について活発な意見交換が行われた。私も自身の研究に対して良いフィードバックをいただき、研究をさらに深めるきっかけとなった。また同年代の研究者とも交流でき、とても良い機会だった。開発経済学に関心のある若手の方々に参加をお勧めしたい。

第 6 回開発経済学会大会は、六本木の JETRO で二日間にわたり開催された。これは JADE の本大会で、国内外から開発経済学者が集い、農業、保健、教育、ファイナンス、ジェンダー、政治経済など、多岐にわたるトピックの研究が報告された。幸運なことに、私の研究が速水賞を受賞することができた。速水賞は、日本を代表する開発経済学者、故速水佑次郎先生の功績を称え、日本の若手開発経済学者の育成を目的とした賞である。このような栄誉な賞を受け、大変身が引き締まる思いだ。JADE 大会委員会の皆様に心から感謝申し上げる。この賞を励みに、さらに研究に邁進し、より多くの発見と貢献ができるよう努めたい。また、JADE でのプレゼンを機に、研究者の方々と繋がることができた。そのおかげで、京都大学、立命館大学、青山学院大学で報告の機会をいただくことができた。多くの先生方にも、この場を借りて御礼申し上げます。



速水賞授賞式でのスピーチ

また、24年5月には、日本経済学会春季大会にも参加した。この大会は経済学全般を対象とした国内最大規模の経済学会だ。開発経済学に限らず、理論やマクロ経済学、ファイナンスなど、扱う分野は幅広い。自身の発表に加えて、普段の研究とは直接関わりのない分野のセッションにも参加し、視野を広げることができた。また、学部・大学院時代にお世話になった先生方や友人とも再会する良い機会となった。

6月には休暇を取り、1週間イギリスに渡航した。社会人学生のため通常はオンラインで指導を受けているが、年に一度は現地に滞在することが求められている。滞在中、指導教官との面談や学内発表を行なった。また滞在中、イギリス南部の複数の大学が主催する PhD 学生向けのカンファレンスにも参加した。学内発表は、大学の先生や学生に向けて研究の進捗を報告するものであり、PhD 一年目の学生にとって進級条件の一つとなっている。会場に入ると、久しぶりにクラスメイトたちと再開できた喜びを感じつつも、緊張感が張り詰めていた。無事に報告を終えた後は、夕暮れに染まるキャンパスのチャナル沿いで同級生たちとの打ち上げを楽しんだ。



キャンパスのチャナル沿いで同級生たちと

8月には、夏季休暇を取得して、チェコのプラハで開催された国際財政学会 (IIPF) の大会にも参加した。IIPF は、公共経済学分野の最大規模の国際学会である。この大会の詳細については、次回のブログで取り上げたい。

最後に

職場では、各国のマクロ経済状況をモニタリングしている。この一年間は、中米や米国、アフリカへの業務出張もあり、多忙な日々ではあったが、学会参加を許容して下さった職場の皆様に御礼申し上げます。また研究活動を支援してくださっている FASID 様にも改めて心より感謝申し上げます。ご支援のおかげで研究に集中することができている。引き続き精進していきたい。